

ある乳児達

秋山美枝子



ある乳児院で、今十六名の親を知らない子等が生活している。以前は殆ど捨児ばかりであったが、今は半数が親に連れられて来た子である。時々親が訪ねて来るが勿論顔など覚えていない。マンマの次にセンセイの言葉を覚えて育つ子等である。約四坪の病室兼観察室、七坪の匍匐室、六坪の寢室があるが、寢室が狭いので、どの室にも寝ている。昼間は匍匐室で遊ぶ訳だが、暖かくなれば廊下やべ

ランダも遊び場となる。靴を穿いて外へ出るのは大好きだ。寢室には小さい赤坊がねているが、柵の浅い寝台なので、歩ける子がいると赤坊の顔を叩いたり、眼を突いたりするので、危く入れて入れられない。然し彼等は一寸の隙があるとすぐ入り込もうとする。鍵がかかかっていないと見ると、すぐ開けて入って行く。全くどんな隙間からでも流れ出る水とそっくりだ。おむつを当てた大きなお尻を振り振

り、ぞろぞろと流れ入り、各々好きな所へ潜り込む。さあ出ましよう、廊下の扉を開けると溢れる様に声を上げて駆けて行く。

この子等の毎日は、七時朝食、十一時屋食、十四時おやつ、十七時夕食で、昼寝は十二時から。一時間―一時間半、就寝は十九時、起床は五時過ぎから六時だが、早くねる子、ねつきの悪い子、いろいろの型がある。赤坊は、六、十、十四、

十八、二十二時の五回食だが、三ヶ月以内の子は六回の授乳から始まる。入院して数日は夜も泣くが、小さい赤坊程慣れるのが早く慣れると殆ど泣かなくなる。それが大きくなって寝台から下りて遊ぶ様になると、他との摩擦が多過ぎて泣くことが多くなつて来る。食事の前は特に賑やかだ。洗って貰った両手を揃えて待っているのだが、待ち切れなくてきゃあきゃあ催促していた子も、頂きますをして食べ始めると急に静かになる。食べさせられていた子が自分で匙を持てる様になると、零しながらも一人で食べようとして、一寸でも触られるのを嫌がる。赤坊の時から此処で育つた子は何でも食べるけれど、大きくなつて来た子には偏食するのが多い。が、暫くすると何でも食べる様になる。この事は大変いいことだけれど、此彼等の大事な食事を、落ち着いて楽しく食べられる様に躑け度い。よ

く囓んで食べることも、最後まで立たずに食べることも、拗ねて引繰返つたり、匙を投げついたりしないで済む様に、始めから終りまで皆が満足して食事を終えることが出来る様に、良い習慣をつけてやり度い。少しのことも見落さずに皆に注意が届く様であり度い。しかし實際は担当者が不足で思う様にならない状態である。

もう一つ、早く躑け度いと思うのは排泄のこと。朝起きた時、朝食の前後、昼食の前、昼寝の前後、夕食の前後、就寝の前、夜中にと、一日に何回か便器に掛けさせるのだけれど、小水の近い子はこの間にもしてしまう。夏になれば昼間はおむつをはずし、夜も暑くなると間が遠くなるので、なるべく早くおむつなしで過せる様にし度いが、便だけは小さい時から便器にする癖をつけ度い。ゆつくりと落着いて掛させ、うんしなさい、う

んうんしなさいと言つて、せかさずにさせる。便器にした時は大いにほめてやり一緒に喜んでやる。毎日同じ時刻に続け習慣となる様にしてやり度い。そしてそれを朝する様にしてやり度い。毎朝起きてすぐ便器にかかり、気持のよいことを分らせ良い習慣となる様に。

三ヶ月頃から果汁等を与え次第に離乳食に進み、一年前後で大きい子等と同じ食事になるのだが、推定で作られた戸籍簿の生年月日では不都合な場合もある。保育はじめてどんどん離乳が進められる状態なのに、戸籍上ではまだまだ離乳に早い月令であるというのでは、記録するのもにも変な具合である。又親が判つて本当の生年月日は五ヶ月も大きかったという反対の場合もある。大体此処へ来る子は栄養失調の様なのが多いけれど、殆どが体が標準以上に育つて行く。

A、二年三ヶ月、二ヶ月で来た。ある

区役所の廊下に捨てた親は後からすぐ判ったが、生活能力なく勿論正婚でない。体が非常に小さいのに顔ばかり大人臭く異様に感じる。心身共に遅れていて特異な行動をする。打伏せにねていて床の上にとすんどすと額を打ちつけるのだ。眠る前にやり出すので傍に付いてやるのだが、夜中にも突然やり出す。起きている時は寝台の手摺に摺って声を出しながら、どかんどかんとやり出すと、木製の小さい寝台は動き出し、うっかきしていると赤坊の方へ乗り移られて、とんでもない悪戯をされて了うので、漕ぎ出されない様に紐で結び付けられたりもする。下へ下りると扉などのかたかたと動く所へ坐って後頭部を打ち付ける。愛情の不足からというけれど、彼は赤坊の時から乳児室勤務以外の者達から特に可愛がられて、毎日の様に抱いて連れ出されていたのだが。愛想は一番よい。赤坊

の時は普通に乳が吸えなかったが、食べる様になったら、ばくりばくりと大口を開けて、うっかりしているとき好きな野菜は他の分まで食べて了う。欲しい時の催促は悲鳴の様だ。

B、二年二ヶ月、推定二ヶ月の時、新宿のあるニュース映画館の小母さんに抱かれて来た。首から背中、股は膝の下までひどいただれ様で、ただれが治ってからも汗もが出来たり、ストロフルスが出来た。赤坊の時は哺乳瓶が空になると必ず泣いたが、今も一番の大食児で他の子等が三分の一も食べていないのにペろりと平げて、お代りなどすると切りがない程、何時までも空の食器を離さぬ。小さい時から首がない程に肥っていて少しも手がかからなかったが、一番人にくっついたがる。赤坊の時人さし指を吸ったりよだれ掛を吸ったりしていたのが矯ったが、今でも台布拭や雑布を手にする時と吸

われて了う。

C、一年八ヶ月、推定二ヶ月で来る。新宿のあるデパートの手洗所で見付けられた。十ヶ月の時里親に貰われて行ったが、半年後に戻されて来た。可愛くてたまらないのだが、手の親指が一寸曲っていて真直にならないからという理由だ。自分の子なら曲っていても仕方がないが貰って育てた子が大きくなってから、世間の人にいると言われるのが辛いからだという。使えなくてもまっすぐの方がよいというのだが、どうも可笑しい考え方だと思う。幾ら曲っていなくても使えない指が付いている方が余程愛で自由だろう。もっと日本の里親にならうとする人が、眞実の子供の幸福を考えてやる様になり度い。自分の為よりも、子供の為を先きに考える様になりたい。

D、二年六ヶ月。牛込のある家の車庫の中にいたという。ひどい異状神経で、

非常な興奮状態が続き、昼夜三日間泣き通した。推定八ヶ月で来たが、最初の日全然人を寄せ付けず、泣いて飲まないミルクも零れると慌てて手で搦んでミルクを搦むと云うのも可笑しいが、口に押し込むという有様。ビタミンDを受け付けない体質から来たというひどい漏斗胸で、眼ばかり異様に光り全く赤坊という感じがなく、余り何時までも慣れないので、一ヶ月後に医師に相談して睡眠薬を服ませたりした。今ではすっかり可愛くなり、年が多いだけに一番よく何でも分っているし、言葉もよく話す。中々氣むづかしく一度言い出したら絶対にそれを通そうとして、他の事で騙されたりはしない。はじめての食物は決して口にしないが、慣れると何でも食べる。食べる時は最後まで行儀よく零したりしない。欲しいと思つて手に入れた物は、勝手に手放したりしない。

E、一年七ヶ月。一ヶ月の時、新宿のある飲食店に置き去りにされ、其の後母親が現われたが又行方不明になったという。ひどい栄養失調で、かさかさとして皺があり、首が曲つていて坐らず、よく肥つて元氣になつても半年近くまで確りしなかつた。眠る時親指を口から離さなかつたが、まだ食物を吸つて嚙むことをしない。指を吸わなくなつたら頭を打つ様になつたが、Aの様に激しくはない。寝台も動かす。まだよちよち歩きだが、外へ出る時は皆と一緒に階段を下りて行く。

F、一年七ヶ月。推定三ヶ月となつて来たが、後で親が判り本当は八ヶ月だったということになる。新宿のある医院の玄關先で拾われたのだが、頭は三分の一程が腫物で大変な悪臭であつた。厚い瘡蓋を取除いて手当をしたらすぐ治つたが其の後次々と頭の中に出来、今でもよく

眼の縁が汚くなる。人見知りがげしく最近漸く新しい人を見ても泣かなくなつた。食事の時皆が大喜びで食卓につくの、彼女だけは知らぬ顔で呼ばれる迄集つて来ない。そして最後まで悠々黙々と食べている。

G、二年二ヶ月。一年六ヶ月で母親と来る。父親はトルコ人だが、正婚ではない。初めの中は度々母親が訪ねて来たが其の中行方不明となつて了う。中々慣れなかつたが今でも一番やかましく泣く。矢張り偏食だったが、今では何でも食べる。細い様でがっちりしている。便器にかける時何時も一番でないとい氣にいらない。

H、二年一ヶ月。父親が結核で入院、母親が外へ出て働かねばならない為、一年四ヶ月で預けられる。家に年の近い兄と姉がいる。実に明るい子で最初の日から全然泣かない。すぐ皆と一緒になつて

遊んだ。初めの中は度々他に嘔み付いて酷い菌型をつけて困ったが、今は全然しない。来た時はぶよぶよと肥っていたが今は堅くぴちぴちとしている。初めての物でも何でも実によく食べる。

I、四十日で連れられて来た。母親が隠れたり現われたりして、手離すと言ったり自分で育てるといったりするので、折角よい里親に望まれても預けられなくて、この子にとっては、こう云う親のあるのが却って不幸な思いがする。勿論正婚でなく、若い母親は別の男と同居しているという。もうすぐ一年になるという可愛い時で、離乳も早く出来、元気に明るく育っている。

J、二年三ヶ月。両親離婚の為、一年六ヶ月で父親に背負われて来た。家に入るときも他家へ連れて行くと泣いて絶対に入れなかつたという話で、抱かれた者だけがみついで離れず、何も食べずに泣き

通し、お茶だけ飲んで寝て了ったが、泣く時は両手や唇を物凄く震わせて、湯呑も持てない程。今では大分よくなり明るくなって、ねついてからも何度も起き上って泣いたのが、此の頃は殆どなくなつた。餌弄りがとても好きだ。偏食がひどく初めはパンも食べなかつたし、漸く食べる様になつた物も形が変わると一口も食べないという風だが、慣れれば何でも食べている。

K、一年。離婚の話が決つて、この子は母親が引取り、姉の方は父親にといいことになつていたところ、母親が一人で家を出て了つたというので困つた父親が五ヶ月になるKを連れて来た訳。ぐにゃぐにゃとして骨の軟い體質で、高熱が続いた後、膝が伸びなくなつて長いこと通院したりした。一時もじつとしていず睡眠時間が少く、すぐ痙攣を起して泣く事が多く、何でも一緒にしているIとは正

反対である。近く母親の実家に引取られることになつてゐる。

L、二ヶ月。結婚する意志もなく生れた子を育てる気もない二人から、他人の子となつて四週間目に連れて来られる。三晩泣いて慣れたら夜は全然泣かない。小さいけれど順調に育つてゐる。

この他にゐる大きい四人は、屋は階下の保育所で過しているのだが、二人は推定一年で来て、Mは四年八ヶ月、虚弱で極端な偏食をし、昼間はよく寝台の下へ潜り込んで埃を指でなすつては口に入れたり、ペラングの窓の砂埃を舂めたり、石炭を美味そうに食べたりし、夜は中々眠らず何度も眼を覚まして泣いていたが今はこの様な事はない。Nは食べる事には全然世話のかからぬ子で、毎日夕食の準備が始まると調乳室を覗き、何度台から落ちても調乳室の窓から離れなかつたことを思い出す。他の子に比べて言葉が

早かったが、体格も良い。

○は三年四ヶ月、産院で生後三日目に母親から置き去りにされた狼咽の混血児、食べられなくて離乳が遅れたが、食べ方を覚えたら偉大なる食欲の持主となつて大きな体をしている。言葉が判然しないが、何でもすぐ覚えてよく喋る。

P、三年半。神経質で小水が近い。この幼い子等を、いやな病気にかからせぬ様強い体に育て度い。これから夏になると薄着になれて嬉しいが、昼間は殆ど裸で過しても、朝夕の涼しい時や夜寝てから冷えない様に気を付けてやらねばならない。おなかを冷さぬ様、夜は大きな腹巻もしている。入浴行水は毎日の事だけれど、汗の出た時、汚れた時は何度でも拭いてやり、汗疹などが出来ない様にし度い。極く暖い日には、ペランダの日向に出したたらいの水で、裸になつて水遊びの出来るのは楽しい。水の好きな

彼等の一番嬉しい事だろう。寝冷の他に一寸した食物への不注意からも下痢など起し易い時だから、特に清潔と新鮮ということに注意し、又ビタミンの消耗の激しい時であるから不足にならない様気をつけよう。又冬への備えにこの夏の間から皮膚を強くしておき度い。薄着の習慣を秋にも続け、冬も厚着にならない様朝夕の着換の時は全部裸にして取換えている。赤坊のおむつを換える時にも背や脚を擦つてやるのがよい。

栄養は充分に与えられ標準以上に育ちながら、ここで育てられてゐる為に知能が遅れ勝となつてゐる彼等が、一日も早く親の許に引取られ、又理解ある里親に迎えられる様になり度いものと願つてゐる。今までに幾人もの子が幸になつて別人かと思ふ程に変わつてゐる子に育つてゐる事を心から喜び、今の自分達が少しでも家庭的にこの幼い子等を遇せる様でな

ければならないと考える。

(東京 二葉保育園)

▽おしらせ▽

第四回

保育事業研究大会

期 日 八月十日(水) 十一日(木)

十二日(金)

会 場 北海道札幌市

札幌市スポーツセンター

第一日 開会式、総会、研究発表会

第二日 部会討議

第三日 研究発表の講評、部会報告、閉

会式

※協議は十五部会に分れて行います。

編集部